

子どもの発達を応援するコミュニケーションペーパー

2006 SPRING / SUMMER

こころん

No.2

-大人と子どものやりとりを楽しもう-



子育てに悩んでいる人が、少子社会の中で増えてきているといわれています。成長科学協会の心の発達研究委員会では、昨年、子どもの発達を応援するコミュニケーションペーパー「こころん」を発行しました。今回は続編として「こころんNo.2」を作成しました。脳と心の関係からとらえた遊びの意味、「絵本」、「ままごと」、「人形」という代表적なおもちゃの解説、そして遊び方を中心として編集しました。子どもも大人も心の底から楽しく遊ぶためのヒントにして頂ければ幸いです。

長田久雄（桜美林大学教授）

● 研究の現場から ●

ヒトとおもちゃと脳

廣中直行（科学技術振興機構）

おもちゃをもらって喜ぶ子。嬉しそうですね。でも、この子はおもちゃというモノに喜んでいるのでしょうか？ 私はそれだけだとは思いません。大好きな人からおもちゃをもらえたという喜び、つまり人と人の暖かいつながりを感じたことが、この子の嬉しさを二倍にも三倍にもしているのではないのでしょうか。

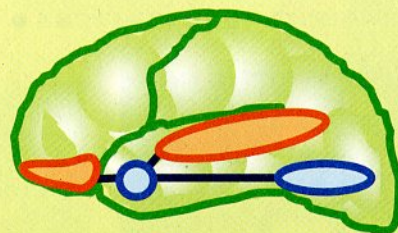
人間の脳を大きく進化させてきた理由のひとつとして、最近の脳科学では社会的な人間関係が注目されています。人間を含む霊長類は、複雑な社会関係の中で他者の表情を読み、視線をと



おもちゃをもらって喜ぶ子

らえて相手の意図を察します。それに応じて自分の行動を柔軟に変え、結果を予測しながら計画を立てて行動します。そうしないと集団の中でうまく生きていくことができないでしょう。

私たちの脳の中には人間関係にとくに敏感な部位があることがわかっています。下の図で示した場所がそれで、赤色の枠で囲んだ中には視覚情報の中から特定の個人（おかあさんなど）を選び出す神経細胞、他者の視線や頭、体の動きに反応する神経細胞があります。青色の枠で囲んだところは脳の表面からは見えませんが、快や不快を判断する神経細胞、将来を見越して行動の計画を立てたり自分の行動を変えたりする神経細胞があるところです。これらが「社会脳」と呼ばれるネットワークを作っています。



社会的認知にかかわる脳構造 左が前
（秋山・三村, 分子精神医学, 2004）

〔ひろなか なおゆき〕

東京大学文学部心理学科卒。医学博士。専門は精神薬理学。現在「嗜癖」の研究をしています。子どもの頃はゴム動力の飛行機で遊ぶのが好きでした。私が飛ばして、弟が走って取りに行く役目でした。ちょっと弟に悪いことをしたな、と反省しています。

おもちゃで遊ぶことにはいろいろな意味がありますね。今回私たちが注目しているのは、おもちゃ遊びを通してお子さんとお母さんやお父さんなど、いろいろな人たちとのつながりが出来てくることです。今回紹介するおもちゃキットの中には、ひとりで遊んで楽しむものというよりも、いっしょに遊んで楽しむものが多く含まれていることにお気づきでしょう。

おもちゃは、子どもたちが現実の世界で暮らして行くための練習になります。絵本の主人公や人形に自分の感情を重ねること、ままごと遊びの動作から他人の意図を読み取ることなどは、「社会脳」を育てるのに役立つことでしょう。すこし大げさに言えば、おもちゃ遊びとは人類の進化を小さな世界の中で復習することなのです。

とはいえ、このキットはトレーニング道具ではありません。楽しいはずのことも「勉強」になると楽しくないですね。まず笑顔で、一緒に楽しんでください。笑顔こそ、人類が獲得した最も大きな財産なのですから。

あそびを通してこころを育てる

宮尾益知（国立成育医療センター 発達心理科医長）

昔の遊びは、集団で、その集団のルールのもとで遊ぶというものでした。そのためには「広場」「ガキ大将」の存在が不可欠です。このように遊ぶことで社会性を育んできたといえるでしょう。しかし最近の、特に都会の子どもたちにとってそのような存在はもはや望むべくもありません。「広場」「ガキ大将」の代わりに大人と子どもがおもちゃで遊ぶことが、心の発達には大切になってきました。

遊びには様々な段階があります。言語表現が十分にできない時期でも、遊びを評価することで子どものころが分かります。たとえば、子どもが眺めたり、読んだりする絵本からも子どものころを読み取ることができます。その子どもの持つ問題点がどの様な心の発達レベルのゆがみから起こってきているのかを理解できるのです。問題は多くの場合、言語性、非言語性の発達レベルのゆがみと周囲からの理解不足が関連しています。（図1）

- 母との同調行動
- 自己の認識
- 共同注意指さし
- 定位操作
- ごっこ遊び
- 自己コントロール
- ソーシャルスキル
- 心の理論
- 学習レディネス

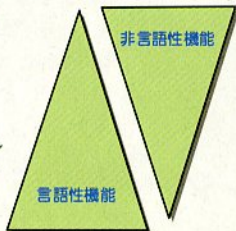
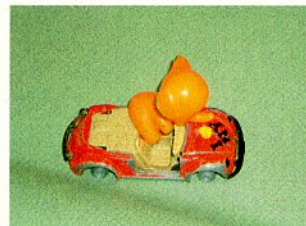
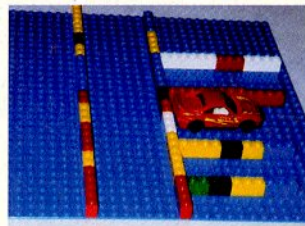


図1: 非言語性機能発達的重要性

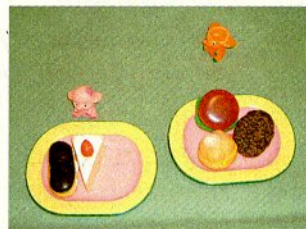
私達は、親子でやりとりを楽しめるおもちゃの組み合わせを考えることを、子どものころを育てるためのプロジェクトとして位置付けました。ままごとは、やさしい、くだもの、ハンバーグ、お菓子、調理器具、食器とミニカーを組み合わせました。絵本は、図鑑、話の起承転結や感情のある絵本として『いやだいやだ』や『ノンタン』などを組み合わせました。人形は、着せ替えが可能であるミルクのみ人形にしました。そして、モノのかたち、機能や用途、ごっこ、相手の状態（表情など）に気付く、相手の立場になる、相手の気持ちを理解するなど、これらのおもちゃを用いた遊び方を発達段階毎に構築することにしました。

あそびの評価の例

- ミニカー：なめる→並べる→車庫に並べる→人形を乗せる



- ままごとあそび：なめる→くっつける→並べる→切る→皿に盛る→人や人形にあげる



- 人形とミルク遊び：

なめる→振り回す→寝かせる→自分が飲む→ミルクをあげる（口以外）→ミルクを飲ませる



- 一人遊び：ビデオのせりふ→ビデオの演技→保育園・幼稚園ごっこ（一人で演じる→役割を振って演じる）→友達との会話（一人で演じる→役割を振って演じる）
- 本：図鑑→物語や筋道のある絵本→表情・感情・相手の立場と気持ちを題材にした絵本

〔みやお ますとも〕 子どもの頃は戦争ごっこやヒーローごっこもしましたが、機械やメカニズムが大好きで、図鑑、科学雑誌、日本の歴史、偉人列伝など、同じ内容をどんどん詳しく書いてある本に替えて夢中で読む、ちょっと変な子どもだったかもしれません。

いっしょにおもちゃであそぼう

柿沼美紀（日本獣医畜産大学教授）

絵本

赤ちゃんは人の様子に関心を持ち、相互作用を楽しむプログラムを持っているようです。乳児は、自分がどう思うかでものごとの判断をしますが、2歳前には、周囲の様子に敏感になりはじめます。4歳過ぎにはまわりのことを考えて行動し、5歳過ぎには相手のために何かをすることがうれしくなります。

『ごあいさつ』などの絵本は、大人と子どもがページをめくって、くり返し一緒に遊びながら、やりとりのタイミングを身につけます。泣く、笑う、わがまま、いじわるなどがテーマの絵本は、主人公や登場人物の気持ちに触れながら話をするといいでしょ。

むずかしい図鑑が好きでも、このような絵本もよろこぶので、年齢にこだわらずにえらびましょう。人との関わりが苦手な子どもには、ぜひ、人の気持ちをとりあげた本と一緒に読んで下さい。



「このクルマおきいね
いっしょにのれるね」

〔かきぬま みき〕

専門は発達心理学。

子どもの頃に好きだったあそびは、着せ替え人形（バービー）と秘密基地ごっこでした。

ままごと

ままごとは、大人の行動を簡単にまねできます。乳児は、ままごとが偽物とは思わないようですが、1歳半頃には、偽物とわかっていながら、本物に見立てて遊ぶようになります。2歳頃には、大人になったつもりでごはんのしたくをするなど、大人とごっこ遊びをするようになります。

ままごとは男の子もよくごっこ遊びます。切るときは感触を楽しみお皿に何でものせるだけで、誘っても一緒に遊ばない子どももいます。盛りつけなどが上手になったら、「くださいな」「ごちそうさま」というやりとりを取り入れ、「何が食べたいですか」と注文をとってみましょう。

ままごとのやりとりは、人との間の取り方、相手の立場に立つなど、社会生活で身につけるべきことの練習がたくさん含まれています。きょうだいが少なく、集団遊びが苦手な子どもは大人と一緒にやってみるとよいでしょう。



「わたしはやっておくから」

人形

上手に動けるようになる1歳過ぎには、弱いものをいたわる行動が見られ、2歳後半には、自分より幼い乳幼児に関心を持って、世話をやこうとします。

普段の子どもは世話をやかれる立場でも、人形と遊ぶときは、今までされてきたことを再現して、世話をやく側になります。ほ乳瓶でミルクをやり、ごはんを食べさせるまねや、「ねんね」といって人形の背中をとんとんしたり、「ごしごし」とお風呂にいれたり、いろいろな世話やき行動が見られます。

電車ごっこ、お店屋さんごっこなど、たくさんの立場を経験できるごっこ遊びは、ヒトに特有な能力で、ことばの発達と社会的な能力を高めることに深く関わっているようです。ごっこ遊びに関心がなかったり遊ぶ機会のない子どもには、「ねんね」「あーん」「よしよし」など赤ちゃんの頃に使っていたことばをかけながら、一緒に遊んでみるとよいでしょう。



「プリンですよ、あーんしよ」



「ねんね、なごめのおちうち」

心の発達を支援するキット

絵本とままごとセットと人形によるごっこ遊びを、発達段階ごとの遊び方と組み合わせることによって「心の発達を支援するキット」として提案します。



大人と子どもが楽しみながら、人について学ぶ機会を与える絵本です。『いはいはいはあすま』や『あーんあーん』など、人との相互作用を促したり、人の感情の変化を描いたものなどが中心です。

ケーキや野菜など、子どもが日常生活で目にしていて、思わず手にとってみたくなるものを集めています。



子どもの興味をひきやすいデザインの人形です。人形遊びの経験のない男の子でも、ほ乳瓶でミルクを飲ませたり、ご飯を食べさせたりと、ごっこ遊びの行動を引き出しやすいようです。

子どもの発達を支援する
コミュニケーションペーパー

こころん

2006年2月1日 発行
発行 財団法人 成長科学協会
心の発達研究委員会
〒113-0033
東京都文京区本郷 5-1-16 NP-IIビル
電話 03 (5805) 5370
FAX 03 (5805) 5371

編集委員 柿沼美紀
高橋桃子
上村佳世子
表紙写真 宮村卓馬
編集/デザイン 高橋峻也
印刷 (株) セトプリント
(c) 本記事の無断転用を固く禁じます